

平成21年度（2009年度）

国際教育 地球市民を地域とともに育てよう Part 8 報告書



財団法人 滋賀県国際協会

は じ め に

構想から約3年の歳月をかけて、国際教育研究会 Glocal net Shigaをはじめ、様々な方々のご協力のおかげで新しい教材を完成させることができました。「言葉が通じないところで、大地震に遭遇したら…?」という設定のシミュレーションゲーム「『言葉がわからない』体験ゲーム 何が起こった? (震災編)」です。動画を使いながら、安心して安全に避難できるかを疑似体験する内容となっています。

これまで、多文化共生に向けた教育活動などに取り組んできましたが、地域住民への周知については依然として不十分な状況にあるという現実が大きくは変わっておらず、日本語から情報を得ることに難しさを感じる方々の日々の生活での苦労や不安について、さらに広く理解を促したいと考えていました。そこで、そうした方々が置かれている厳しい状況がより増幅する災害発生時を想定した教材を開発することになりました。

教材に収録しているポルトガル語アナウンスを吹き込んでくれたのは、県立高校に通う現役のブラジル人高校生でした。彼女は、日本語があまり理解できない両親のために「自分がもっとしてあげられることはないかと常に感じている」と胸の内を明かしてくれ、今回の教材作成にも快く協力してくれました。また、新潟県中越沖地震（2007年7月発生）を体験された留学生たちの文集からは、その前に起こった中越地震（2004年10月発生）を経験した4年生たちが、その経験をいかして後輩たちをサポートしたことにより混乱を最小限にとどまらせることができたことがうかがえました。

確かに、内閣府では外国人を災害時要援護者と定義しています。しかし実際には、災害発生後は留学生たちもボランティアで地域を支える側として活動していた様子が書き記されており、彼らも地域の貴重な人材であり、日本人と外国人とが共に助け合える関係であったことがわかります。

地域に暮らす全ての人たちが、日頃から安全で安心して暮らせる多文化共生の地域づくりについて、この教材をきっかけに皆さんと一緒に考えていければと願っています。

平成22年度に行った国際教育に関連する事業や資料をまとめました。
みなさまの参考になれば幸いです。

平成23年(2011年)3月
財団法人滋賀県国際協会

平成21年度（2009年）国際教育ワークショップ

「地球市民を地域とともに育てよう Part.8

ことばがわからない…ってどんなきもち？

～“多文化共生”を参加型学習で考えてみよう～

依然として、途上国では子どもや女性の識字率の低さが大きな課題となっていますが、現在の日本国内においても、多くの外国籍住民が言葉の壁に苦慮しながら生活をしているという実態があります。そこで、言葉がわからないことから生じる不安な気持ちや不利益を被るなどの疑似体験をする学習を通して、すべての人にとって暮らしやすい多文化共生の学校やまち、社会づくりのためにはどのような取り組みが必要かについて考えます。



<第1部>

「非識字体験ゲーム ここは、何色？」

<全体>

世界にはさまざまな言語があります。一見すると模様や記号にしか見えないものが、学ぶことで意味をもつ“言葉”として理解できるようになるものです。多様な言語に触れる楽しみや、読めなくて理解できない歯がゆさといった感覚をぬり絵という簡単なゲームで体験します。



【ワークその1：グループ分け】



<ファシリテーター●森雄二郎さん>
国際教育研究会 Glocal net Shiga



【ワークその2：ワークシートの図柄を見つける】

※分けたグループでさらに2人で一組のチームとなる。

【ルール説明】

100マスに指示通りの色を塗ると、ある図柄が浮かび上がってきます。

課題①：100マスに隠された図柄を解答してください。

課題②：使用されているコトバについて、「読み方」「言語名」を解答してください。

★部屋の中にコトバ情報が掲示されている。

★チームで1回に立ち歩けるのは1人だけ（リレー形式）。

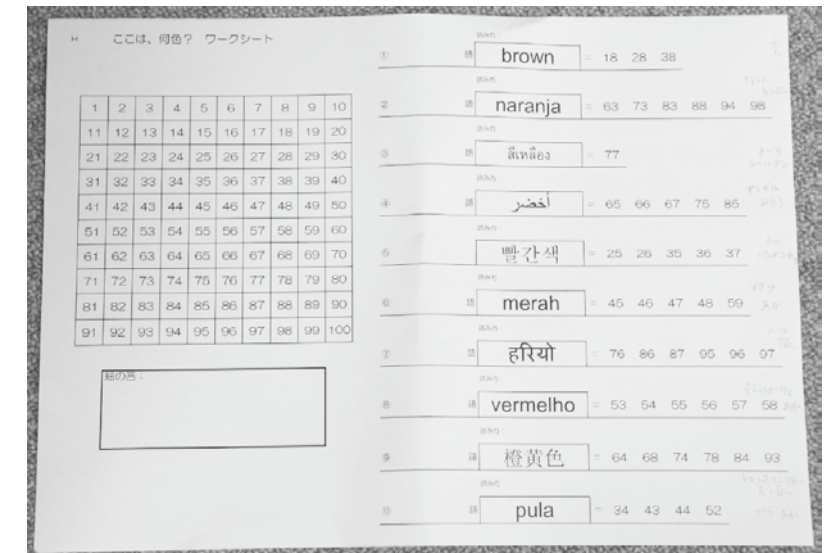
★1回につき1つのコトバしか調べることができない。

★ワークシートを持ち歩いてはいけない。

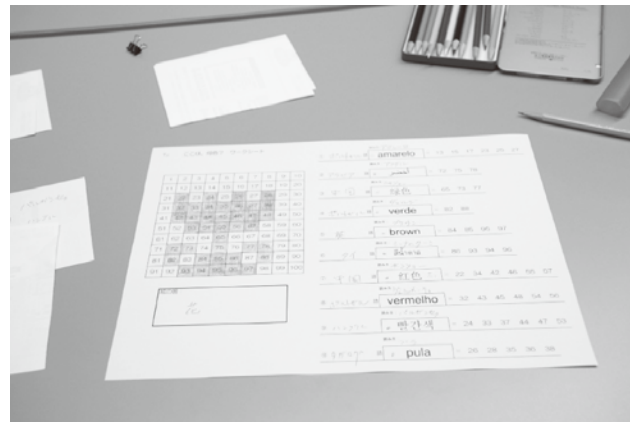
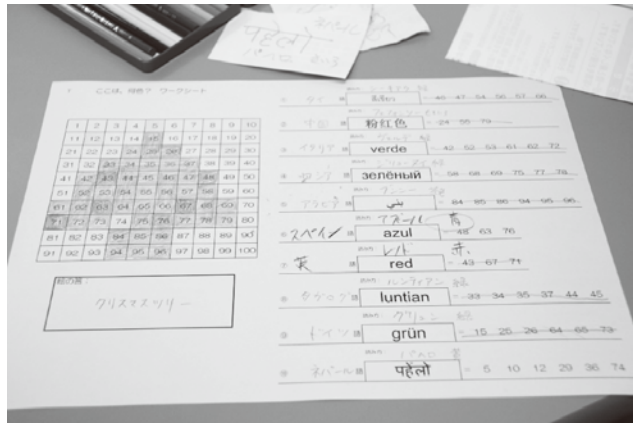
★メモ用紙・筆記用具は自由に持ってもよい。

★マスは丁寧に塗ること。

★1枚仕上げたチームはさらにもう1枚挑戦する。

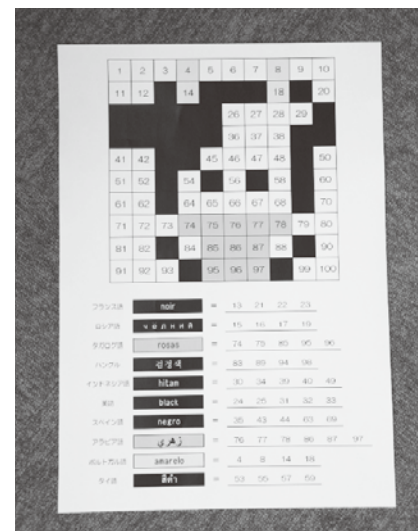
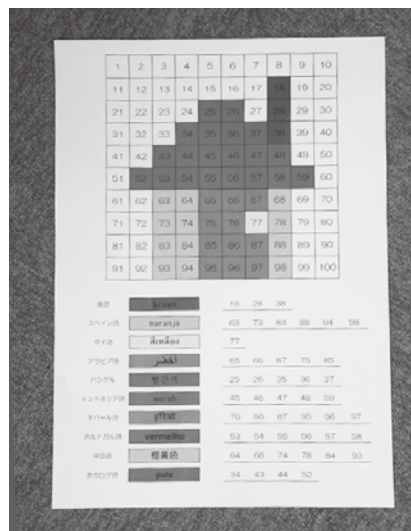
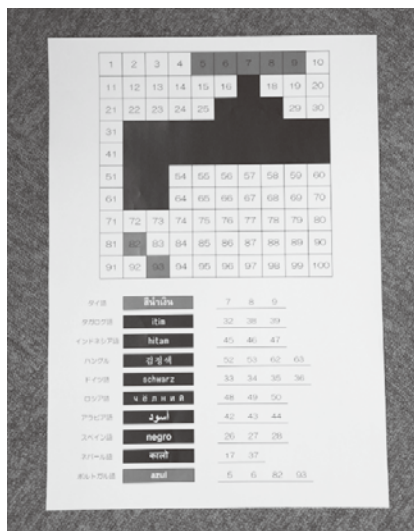
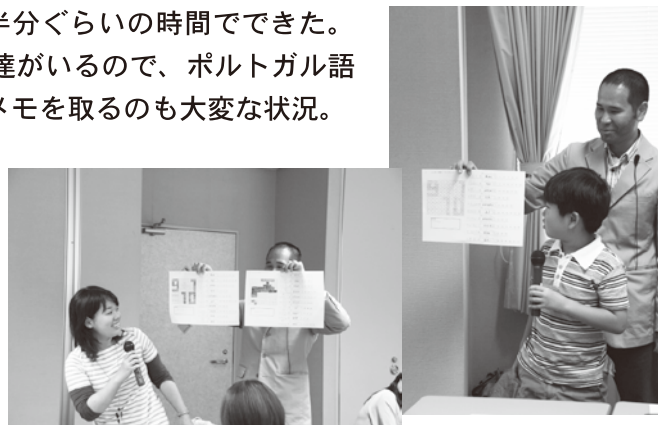


1枚仕上げた
チームはさらにもう1枚挑戦！



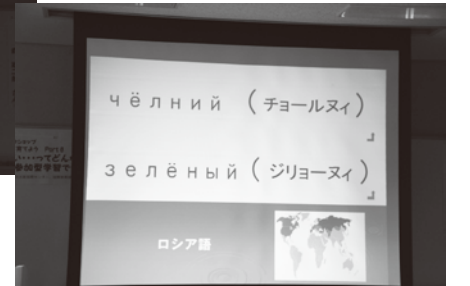
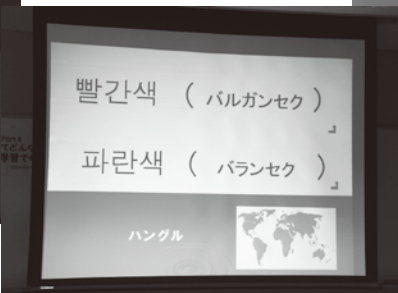
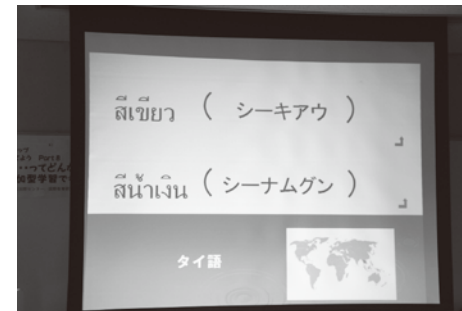
【ワークその3：各グループで感想を発表】

- 欧米系の言葉は発音も想像しやすかったが、アラビア文字は検討もつかない状態。中国語、ハングルなどは同じアジア人なのに、理解ができていないことに気づかされ、反省させられた。
- 読み方がほとんど分からなく、勉強になった。（小学校5年 男子）
- 私は富山からきました。私の地域ではロシア語やアラビア語圏の人が多いので、その言葉は見慣れていましたが、他の言語は全く分からなかった。
- 1回目は手間取りましたが、2回目は1回目の半分ぐらいの時間でできた。私の勤めている小学校にもブラジルの子ども達がいるので、ポルトガル語はまだ分かるのですが、ネパールの言葉は、メモを取るのも大変な状況。
- 言葉の切れ目も分からなかった。
- 様々な言葉を知ることができて良かった。
- 韓国ドラマにはまっているので、ハングルは多少分かると思っていたが、実際書いてみて、全く分かってないことに気づかされた。



【ワークその4：ふりかえり】

- 1) 世界地図の分布図から、その色で塗られている地域はどこで、どんなコトバを使っているかを再確認する。



2) コトバの分布について

- ◆特定の国で使われているコトバ [タイ語・日本語]
- ◆特定の地域で使われているコトバ [アラビア語・ハングル]
- ◆世界各地で使われているコトバ [英語・フランス語・スペイン語]

3) コトバの色々

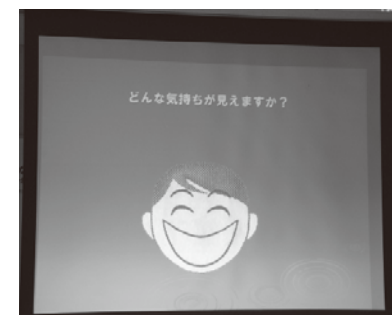
- ◆世界で一番使われているコトバは何語？ [①英語 ②スペイン語 ③中国語 ④ロシア語]
- ◆世界には何種類くらいのコトバがある？ [①～200 ②～500 ③～1000 ④2000～]
- ◆今、コトバの数は増えている？減っている？ [①増えている ②減っている]

4) コトバ（言葉）とは何か？

- ◆「音声（話す・聴く）」「文字（書く・読む）」を通して、一定の意味を表現したり、伝達したりするためのもの。
- ◆人間の営みの中で作り上げてきた貴重な文化財産であり、人や社会とコミュニケーションするための大切なツール（道具）である。



「どんな気持ちに見えますか？」



A.笑った表情

B.怒った表情

C.怒っているのか、怖いのか判断がつかない表情

人間は言葉以外にも、非言語コミュニケーションというのを持っています。表情はまさに自分の思っていることを伝えています。日本人は特に相手の表情や仕草から相手の思っていることを感じ取ろうとする民族です。しかし、[C]のように表情だけでは伝わらない場合があります。例えば「お腹がいたい」を言葉にすることによって、相手に伝えます。言語によって相手に気持ちを伝えたり、相手からの言葉で気持ちを理解することができます。リンゴの絵のように、同じ概念を共有していれば、言葉を発することで、多くの人にメッセージを送ることが出来ます。言葉と一緒に社会で生きていく上で必要な能力ではないかと思います。ただ、この能力の「ある、なし」に差があるのです。

◆人は、コトバによって、概念を生み出し、共有することができる。

コトバを「話す・聴く・読む・書く」ということ・・・

★自分の気持ちを伝えたり、相手を理解することができる。

★一度にメッセージを送ったり、残したりすることができる。

社会に生きるために必要な能力

■ 日本の識字率（文字が読める・書ける人の割合）は？

[①85% ②90% ③95% ④100%]

■ 世界には、非識字者がどのくらいいる？

[①1億人 ②4億人 ③8億人 ④12億人]

※世界の平均が85%だが、アフリカは30%に満たない

■ 滋賀県の小学校（約230校）で日本語指導が必要な生徒は？

[①300人 ②500人 ③700人 ④900人]

滋賀県での日本語指導が必要な外国人児童生徒の在籍数

（平成20年9月1日現在）

13市11町	小学校	95校	738人
	中学校	44校	226人
	合計	139校	964人

母語別在籍数	ポルトガル語	653人
	スペイン語	194人
	タガログ語	45人
	その他（13言語）	

<問題定義>

自分の知らない言語を調べるのは大変であるということが、今回のワークショップでわかっていただ

いたかと思います。実際に、日本に来て、全く日本語がわからない子どもたちが、現在、小学校、中学校合わせて1000人近くいます。同様に、この子どもたちのご両親にも日本語が書けない読めない人がたくさんいます。そういった方々が、身の回りにたくさんいるんだという認識の中で、彼らのために、または社会の一員として、どういうことができるのかを是非、考えていただきたいと思います。

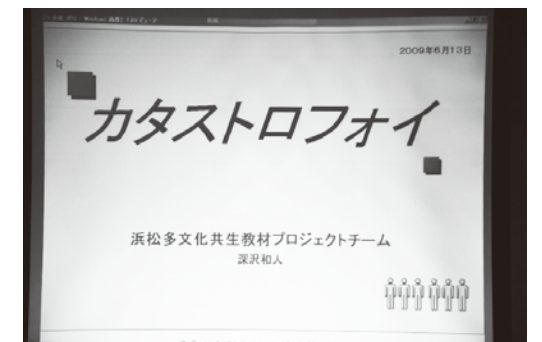
もし、身の回りにコトバがわからない人がいたら、
どのようなことに配慮すべきでしょうか・・・

<第2部>

「防災をテーマに ゲーム カタストロフィ」

<全体>

あなたは架空の街カタストロフィにすむ外国人。ある日、経験したことのない災害に遭遇。家族と自分の命を守るためにいくつか用を済ませ避難しなくてはなりません。必要な情報をどうやって入手したらいいの。いま私たちが暮らす街はすべての人にとって暮らしやすい街でしょうか。具体的な提案にも発展していくロールプレイゲームで外国人になった自分を体験します。



<ファシリテーター●深沢和人さん>

多文化共生教材プロジェクトチーム
静岡県の高教員（英語科）。国際理解教育・開発教育に関わるようになって10年。07年より有志数名と「浜松ならでは」を合い言葉に開発教育の教材開発を始める。主にカタストロフィを担当。勤務校では1年生を対象に総合的な学習の時間で多文化共生に関わる授業を担当している。日本人を含むさまざまな国の高校生からなる多国籍グループに、参加体験型学習を英語でファシリテーションするのが夢。

[カタストロフィの目的]

大規模災害が起きたときの

- ① 外国人が経験する困難を類似体験し、
- ② 避難する際の問題点に気づき、
- ③ それを克服する具体的な手段を考える。

[ゲーム方法：全体]

みなさんは架空の街に住む外国人です。

ある日、このまちに「カタストロフィ」という大災害が起こります。経験したことのない災害に直面し、避難するところからゲームが始まります。ことばも習慣もわからず、まだ友達もいません。そんなまちで、家族と自分の命を守るため、必要な用事をクリアし、避難できたら「あがり」です。



【ルール】

(1) 話してはいけません！

・近くに同じ国から来た人はいないので、あなたが話しかけても、ことばは誰にも通じません。隣の人と話しかけても、意味がわからないので答えないで下さい。

(2) サイコロを振って、それに従え！

(3) 2カ所で、2つの用事をクリアしろ

・あなたはこれからある場所（2カ所）に立ち寄って「2つの用事」を済ませることができたら「あがり」です。用事を済ませられたら、コマを引きあげてください。

(4) パスは1カ所につき、1回だけ！

・あなたが立ち寄る「2カ所」には、張り紙があります。張り紙を読んで、どうしてもよくわからないときは、サイコロを1回パスできます。ただし、1つの場所につき、1回しかできないので、次は自分で考えて、思い切って行動してみてください。

【ワークその1：架空の街の地図の上に指示カードを主要建物を置く】

架空の街の地図の上に描かれている主要建物の上に、その主要建物と同じ絵柄のカード（指示カード）を置く。裏は見ない。（裏には様々な指示が書いてある）



【ワークその2：あなたはこんな人】

グループ5人がそれぞれカードの人物になり、お互いにカード人物の自己紹介する。

※各人が持っている人物カード



【ワークその3：ゲーム開始】



15分間ルールにのっとりゲームを始める



立ち寄り地点でカードをめくり、読めないことばに戸惑った表情の参加者。

【ワークその4：ふりかえり／ゲームの感想】

グループで下記の3つの点について話し合う。

立ち寄り地点では皆さんの心の中で何が起きましたか。

★ 張り紙を見たときの気持ちはどんなでしたか。

★ 判断はどのようにしましたか。

★ 何か困ったことはありましたか。

＜感想＞

- 張り紙を見つけたとき、やっと辿り着いたのに、わからない文字が書いてあってすごく、不安に思えた。それとは反対に絵があると、なんとなくホッとしたという意見が多かった。
- 全体にサイコロに振り回されて、凄く疲れた。
- 災害時はこのように簡単に進めないだろうということ。
- 皆さんの感じ方は、もどかしい、イライラした。
- 何もできないで自分に腹が立った。
- 落胆して、何もやる気がなくなった。
- 相談できる人がいないのが不安。誰か助けてという感じ。
- 水飲み場の絵を強引に飲んでいいと理解した。
- ことばがわからなくても聴く手段はある、実際はどうになるのではないかな。



【ワークその5：ふりかえり／必要な対策】

参加者は東京新聞の記事「新潟中越地震」を読み、「外国人の安全で円滑な避難のためには何が必要か」を、『困ったこと』とそれに対する『必要な対策』を軸にグループで話し合う。

〔講師からの説明〕

この教材づくりは阪神淡路地震や新潟中越地震の記録を読むところから始まりました。外国人の設定は、100%架空の内容ではありません。実際に、母国の家族との電話で地震が起きたことを知ったという外国の方や、避難場所は選挙の場所と言われたものの、選挙権がないので、行ったことがなくわからなかったという人。倒壊した建物を見てクーデターが起きたのではというフィリピンの方もいました。保険の未加入の問題なども、実際の新聞の中から引用しました。

張り紙（指示カード）は、横浜国際交流協会が作っている災害時における外国語の表示シート集から作られたものです。絵文字（ピクトグラム）の内容は電話ボックスもコンビニの表示も、「行けます」「入れます」という肯定的な内容です。

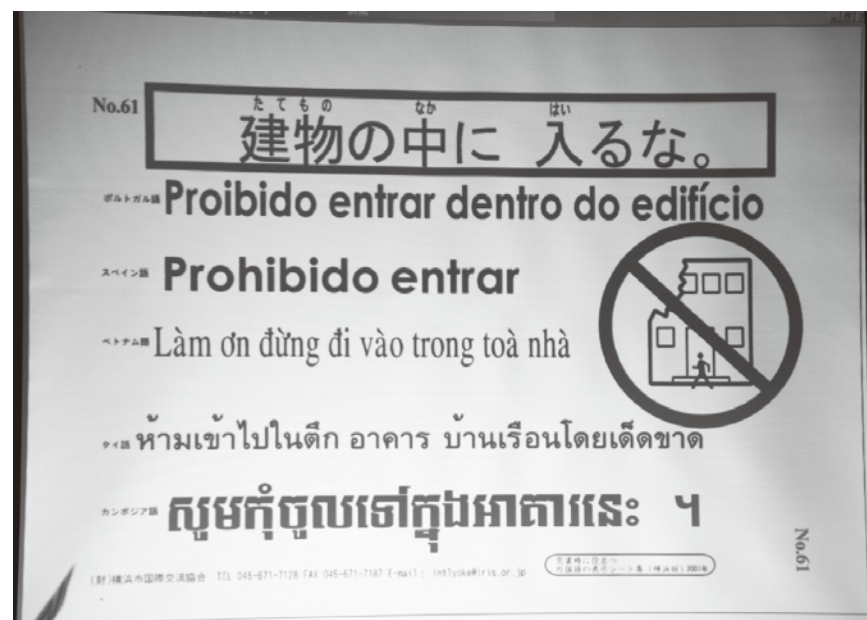
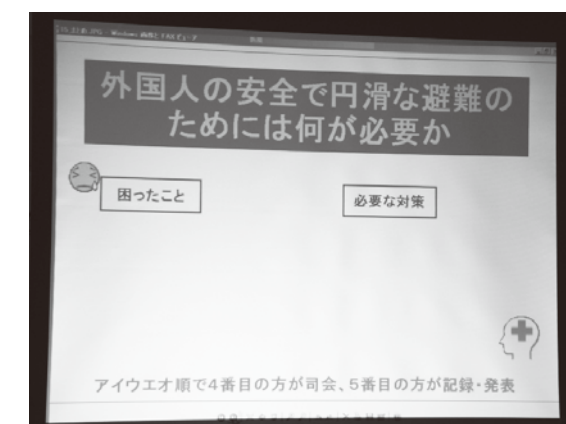
ゲームの中で「避難場所を探す」という課題があったと思いますが、地下駐車場に行かれた方はありますか。アメリカなどの大陸では竜巻（トルネード）が多く、トルネード避難訓練ではアメリカでは決して建物の中には行かないのが現状です。このように、国によっても災害についての受け取り方は違います。

＜発表＞

- 絵だけでは何が言いたいかわからないので、セットで文字も入っているとわかりやすい。また、世界共通のマークがあると助かる。
- 災害時で1人になったときに心細いので、地域との人間関係を作らなければならない。
- 携帯に母国でインフォメーションが入るといい。



東京新聞2004年10月26日掲載



- 書かれている言語がわからないので、出来るだけたくさんの言語で表示されているといい。
- 平仮名やカタカナ、ローマ字表記など、書けないけど読める人たちに分かりやすいことばで表記されているといい。
- 外国人が住まれる時に、自治体から災害マップや絵表示に関する説明書きのあるものを渡すシステムが必要。
- 外国人の方はどれだけ119番や110番を知っているのだろうか。
- 言語表記の中に英語がなかった。少なくとも世界で一番使われていることばとして、英語表記は最低必要。
- コンビニの前や電話ボックスの前におかれている表記が携帯のマークで、意味がわからない。表記の仕方に対策が必要。
- ことばがわからなくても、こういう非常時には多くのボランティアさんの助けが必要。
- 外国人がこのまちで安全に住んでもらえる情報が提供できているのか。それは、行政それともNPO、NGOがするのかはっきりさせることが大事。
- 災害時外国人サポーターを滋賀でしています。地震自体がわからない外国人の方に、携帯の番号を押せば、多言語プラス絵付きの情報を携帯に送るシステムを作ろうとしているところである。



ということですが、イスラム文化圏では十字はタブーですので、文化や宗教の違いにおいて非常に難しく、現在、共通するものはありません。

私の家の近所の都田南小学校の所にあるマークです。非常口のマークに日本語と英語とポルトガル語で「ひなん地」と場所を示しています。

これは、看板屋さんの提案看板だということでした。詳しく調べると、他の小学校ではまた、違った避難所マークでした。

このように統一されたピクトグラムがないということは問題であると思っています。皆さんにこうした問題提起と、避難地を表すピクトグラムを描いていただく活動をしていただきたい。そういう思いが、この「カストロフォイ」というゲームでわかっていただけたかと思います。



【ワークその6：ふりかえり／目的の再確認】

今回のゲームの目的を再確認する。

<目的の再確認>

大災害が起きたときの

- ①外国人が経験する困難を類似体験し、
- ②避難する際の問題点に気づき、
- ③それを克服する具体的な手段を考える



避難地を表すピクトグラムは現在、世界共通も、日本独自のものもありません。本来はピクトグラムをこの後に作ってもらうのですが、今回は時間がありませんのでできません。私が調べていくなかで、避難地を表すピクトグラムの候補としてはみどり十字が一番近いのだろう

＜第3部＞

「読めないお知らせ」

＜全体＞

日本での生活経験が乏しい外国人家庭や日本語以外を生活言語としている家庭の子どもたちは、学校が発信する情報をきちんと理解できないことがつまづきの一つの原因になります。学校は、日本語と日本社会への理解があることを前提として家庭への連絡を行いがちです。しかし、実際には連絡が正確に伝わらないことがあります。情報の受け手の立場に立ってどんな配慮が必要かを考えてみます。

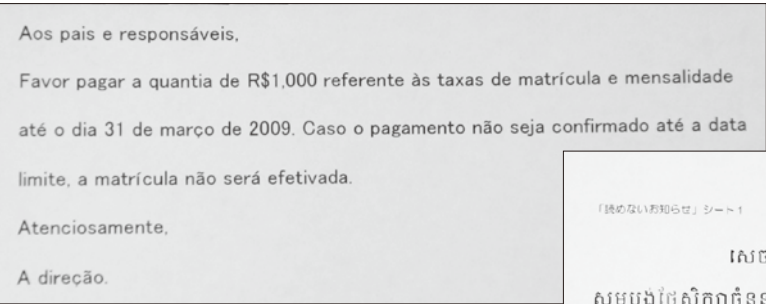
【ワークその1：読めない通知文を解読する（？）】

各グループに読めない通知文を配布。グループ内で書いてある内容を推測する。

通知文はクメール語、ポルトガル語、ハングル、中国語の4カ国語で「期日までに授業料を納めなければ、入学を取り消す」という内容。中国語以外の通知が配られたグループは、全く読むことができなかった。

＜設定＞

あなたは仕事の都合で、家族と共にある外国の地方都市で暮らすことになりました。近くに日本人学校はなく、子どもは現地の学校に入学させることになりました。入学手続きはなんとか済ませたのですが、ある日学校から通知文が届きました。言葉がわからず何かが書いてあるのかさっぱりわかりません。大切なことかもしれません。家族で通知文の内容を推測します。



（ポルトガル語）

※わかったチームは報告し [ワーク2] の作業にかかる



＜ファシリテーター●田中祥一さん＞
かながわ開発教育センター（K-DEC）「かながわ開発教育センター」のメンバーとして「かながわ発」のワークショップ作り、教材作りを楽しむとともに、NPO法人「ふれんどしっぷASIA」の活動でアジアへの国際協力に関わる。最近の関心は、山、走、農、職場の親睦。神奈川県立高校の英語科、国際科教員。



【ワークその2：「修学旅行説明会のお知らせ」を外国人保護者に伝える方法は？】

日本語で書かれた「修学旅行説明会のお知らせ」（内容は右記）を外国人の保護者に伝えるためにはどうしたらよいかを各グループで話し合い、その案を発表の紙に書く。

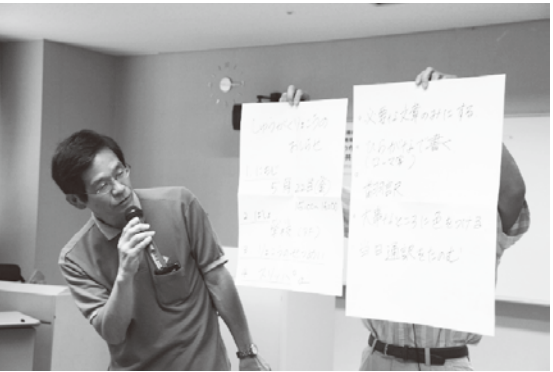
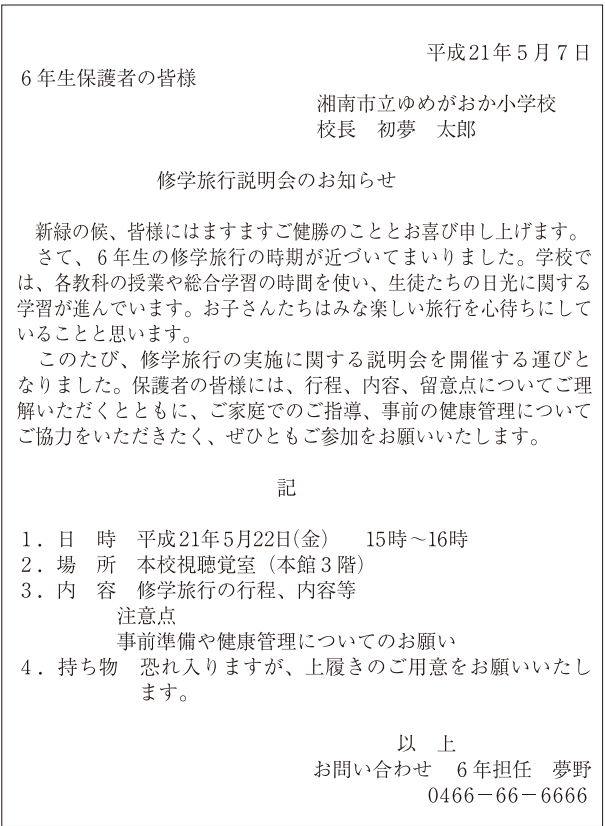
＜設定＞

ゆめがおか小学校6年生の全家庭に配布した通知です。ゆめがおか小には、日本での生活経験が半年～数年程度の外国につながる児童※が数名在籍しています。本人は友だちとの会話がある程度できますが、親は日本語をほとんど理解できません。それらの児童の家庭には、学校からの通知文の内容がきちんと伝わっていないようです。修学旅行説明会のお知らせを伝えるためにはどうしたらよいか、グループで話し合い、その案を発表用の用紙に書いてください。

※外国につながる児童…外国籍児童および外国にルーツのある日本籍児童

＜発表＞「お知らせ」を伝えるためにどんなことに気をつけ、どんな工夫をしたか。

- 必要な文章のみにする。その文書に平仮名もしくは、ローマ字で表記する。もしくは専門の方に翻訳してもらう。一番大事な所には赤線を引くなど視覚的にわかるようにする。当日の説明会には通訳のできるボランティアさんに同席していただく。
- お金があるところであれば、その国の言語に翻訳してもらうか、やさしい日本語に変える。その翻訳した紙を持って家庭訪問して説明する。翻訳が不可能な場合は、イラスト、写真、絵文字などを使ってビジュアルで伝える。また、子どもが親へ伝えられるように担任が指導する。
- 日本語を教える場合は漫画か絵を描くので、同じように絵で分かりやすく伝えて、子どもは母語で親に伝えることを考える。



■ 通訳さんに翻訳してもらおう。修学旅行などの概念がないことも考えられるので、映像など視覚的素材を活用する。子どもに説明するときは平仮名や絵を使ってわかりやすく読んでもらいやすい紙面にする。

■ 親の方が言葉がわからないケースが多いので、子どもが読んでわかる説明文を考える。

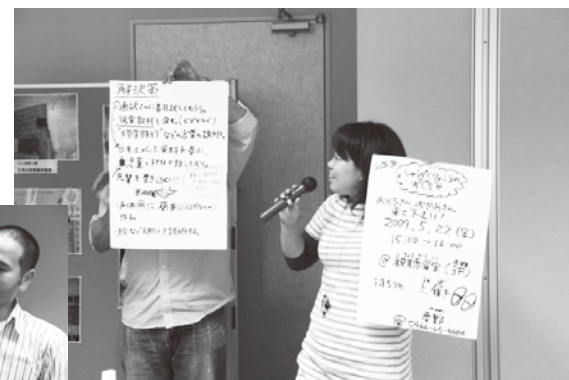
外国の方といっても様々な国がある。中国の方は漢字を残して、ルビをつける。内容はわかりやすい日本語にする。まず説明会に来てもらうことを目的とし、このお知らせにはどこに行くという細かい内容は書かない。日付は西暦にする。

■ 難しいことは考えない。担任が子どもを通じて説明できるものを、ビジュアルを多く使ってつくる。

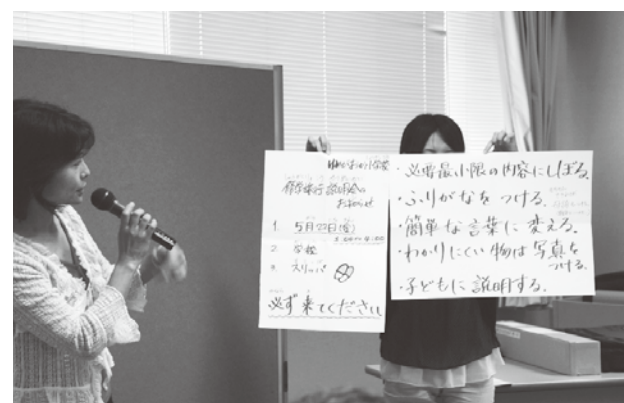
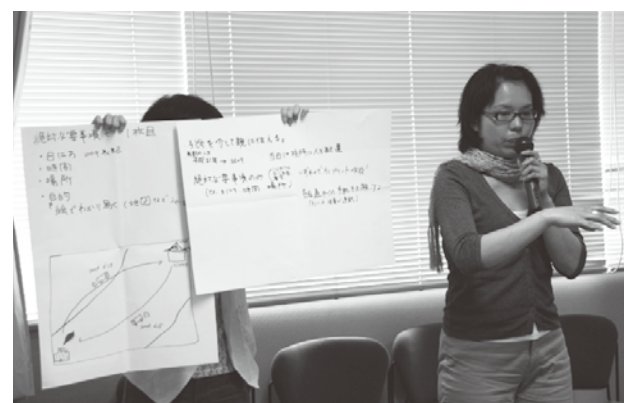
■ 子どもに優しい日本語で伝えて、それを親に伝達してもらう。絶対必要事項として、日程、時間、場所、目的を表記する。目的はビジュアル的にわかりやすくする。当日は校門に人を配置する。通訳の手配が難しい場合は、比較

的言葉のわかる子どもと一緒に説明会に同行して、親に説明する。

■ 翻訳した用紙を持って家庭訪問がベストであるが、それができない場合は、必要最小限の簡単な言葉で表し、この説明文を子どもから親に伝えるということを前提に考える。説明会に来てもらうことが一番大事なので、そこは赤ラインなどして強調する。外国の方は24時間表記（アメリカの軍隊表記）はわかりにくいということなので、12時間表記にする。



▲投票で一番票が多かった内容

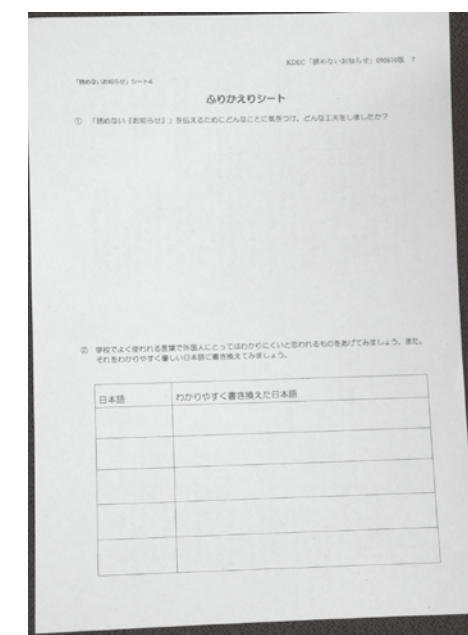


【ワークその3：ふりかえり1】

各自、文書という形に限定せずに、用件を伝える上で、重要なことを3つ「ふりかえりシート」に書き出して意見交換する。各グループの案の中でもっともわかりやすいと思うものに各自投票する。



★情報量を精選したところに票が多い。
★難しい言葉は避ける。



＜発表＞「お知らせ」の内容を伝えるための重要点。

- 誰でもがわかるマークを作る。
- 写真とかイラストを使ってできるだけわかりやすくする。
- 紙を渡して終わりにしない。（文字に全てを語らせない）
- 子どもに説明させるようにする。
- 必要な項目だけで、余計な不安を持たせないようにする。
- 時間など共通の表記にする。
- アラビア数字と絵文字で表現。
- 一年の学校行事を4月の初めにあらかじめ渡しておく。一回の情報では混乱するため。
- 簡単な日本語で表す。
- 文章を省きすぎない。「小学校」などの慣れ親しんだ文字はあえて使用する。



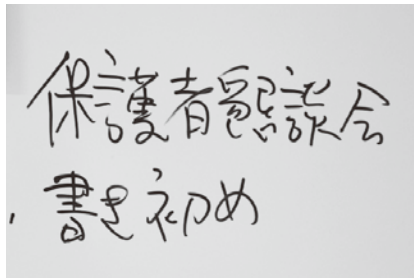
【ワークその4：ふりかえり2】

小学校でよく使われる言葉で外国人にとってはわかりにくいと思われるものをあげ、それをわかりやすい優しい日本語に書き換える。

<発表>

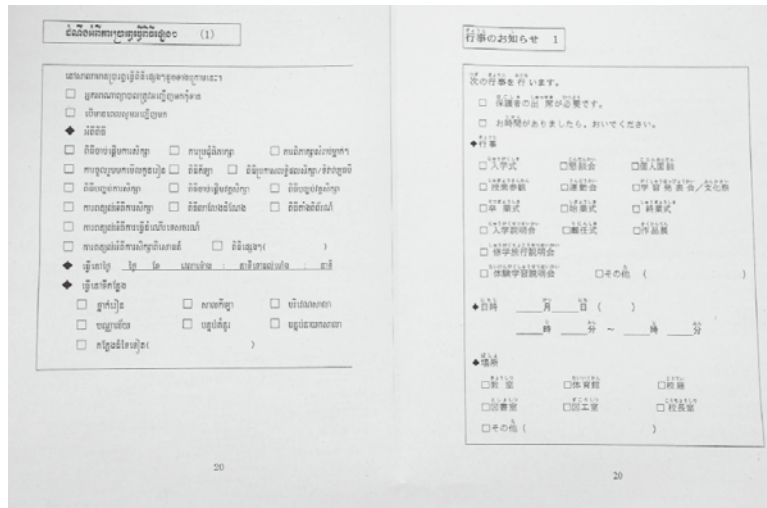
- 『授業参観』→子どもたちのクラスを見に来てください。
- 『懇談会』→先生とお母さんが話をします。
- 『給食当番』→「学校で料理をする人」としたが、「料理をする人」ではないので表現が難しい。
また、給食当番自体がないからわからないのではないかな。
- 『身体測定』→背の高さを測ります。体の重さを量ります。
- 『書き初め』→前年度の制作物の写真を見せる。
- 『自由研究』→「興味のあることを観察、実験する」としたが、「観察、実験」も難しい。

※漢字と言葉自体が難しい『保護者懇談会』という言葉伝えるのも困難だが、『給食当番』や『書き初め』など、文化的背景のあるものは、言葉をつくしても伝えにくい言葉でもある。

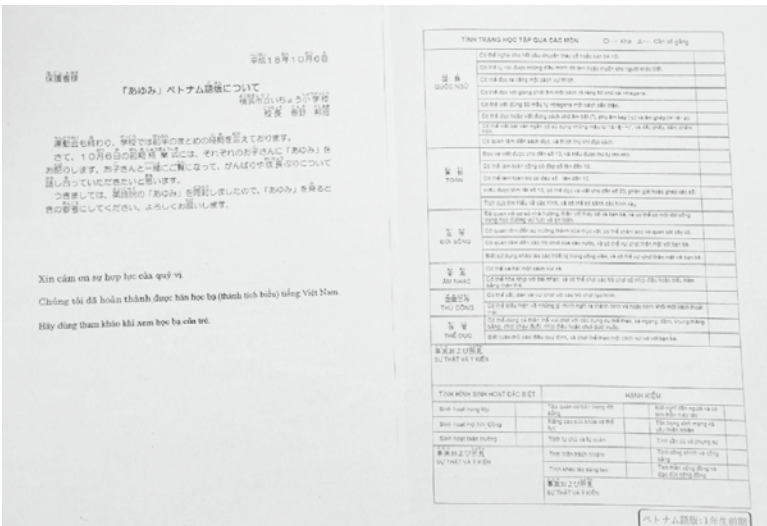


【横浜市立いちょう小学校 の取り組み例】

神奈川県横浜市と大和市にまたがる県営いちょう団地は、外国籍の方が非常に多い地域である。団地内にある横浜市立いちょう小学校は生徒の約半分が外国籍の子どもで、校内のお知らせ用紙は、通訳の方に依頼して作った各国語の翻訳版を用意している。行事のお知らせでは、チェックボックスがあり、担任がチェックを入れて簡単に使えるようになっている。日本語版と並べて作れるようになっていて、見る側も、必要な情報だけ読める工夫ができています。



▲左はカンボジア語



【ワークその5：ふりかえり3】

最近は国際交流協会やNPO、行政の対応で翻訳された印刷物や通訳サービスも以前よりは多くあり、外国語のFM放送やインターネット上でも各国語の情報が提供されているが、日本語を母語としていない人は依然として十分に情報を得られていないのが現状。その壁がどこにあるのかを「ある中国留学生の体験」を読んで考える。

<感想発表>

- 普段は勇気がないとなかなか外国の人に声をかけられないが、困っている外国人の方をみかけたら、声をかけたいと思った。
- 日本人は親切である。外国では日本人に対して日本語で説明しようということはないし、日本でも平気で英語で話しかけてくる。外国語でなければならぬということではなく、伝えようとする気持ちが伝わるのだと思った。
- 小学校の教師です。以前はクラスに一人だけ外国人がいたら、クラス中でお互いに関わって言葉を伝えようという努力をしていたが、クラスに4、5人になると、その少数派で言葉が通じるため、お互いが積極的に関わらなくなってきている。これを読んで、子どもたちにどうしたら心の言葉が伝わるのかを考えていきたいと思った。

<まとめ>

言葉やツールも大切だが、人としての接し方やコミュニケーションをとろうとする気持ちも大切なのではないか。これを結論とせず、各自で受け取り考えてほしい。

ある中国人留学生の体験

日本に来たのは夏でした。夏休みが終わって小学校に行き始めるとすぐ、運動会でした。担任の先生が心配して、運動会のことについて紙に書いて熱心に説明してくれました。

運動会の当日になりました。本番ではみんながバタバタしていて、私は教わったことが全て頭からふっとんでしまいました。緊張してとまどっていると、「わかってないな」と思ったのか、周囲の人が、次の集合場所に連れて行ってくれたり、次にすることを教えてくれたりしました。結局、事前に教わったことよりも、周囲の人が助けてくれたことが役に立ったのです。

私は何もわからなくて、とても心細かったです。そんな人がいたら、助けてあげてください。友達になってあげてください。小さな親切がすごく大きな励ましになります。書いたり話したりする言葉がわからなくても、心の言葉は世界共通です。心の言葉のおかげで、私は日本語が全然わからなかったのに意思疎通することができました。

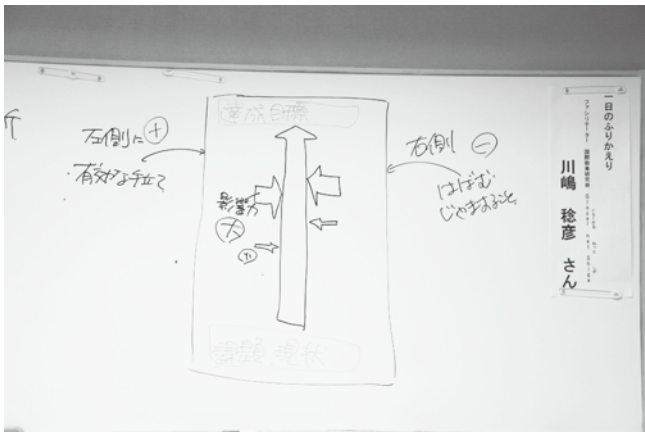
(中国人留学生 周 首能さん)



<一日の振り返り>

【ワークショップ『力の分析』】

外国籍の人、外国にルーツを持つ人が持っている課題や現状を下に書く。上にこんな多文化共生社会になったらいいという達成目標を書く。左側にこれに向かっていくのに、有効な手立てを（+要因）、右側にはそれを阻むもの、邪魔するもの（-要因）を書く。それぞれ影響力が大きいものは太い矢印で描く。



<ファシリテーター●川嶋 稔彦さん>
国際教育研究会 Glocal net Shiga



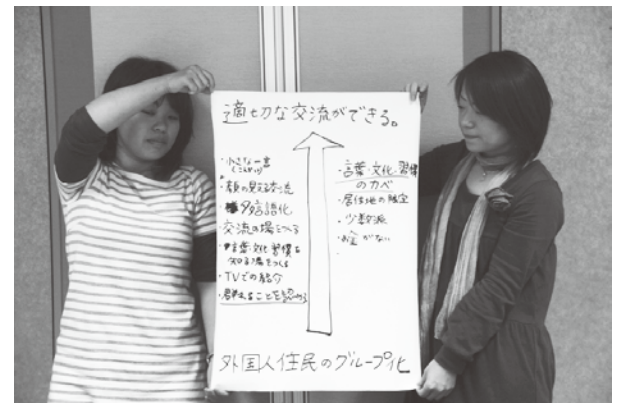
<発表>

★私たちは今滋賀県に最も多い外国籍の労働者が一番イメージしやすいのではないかとすることで、日系ブラジル人を対象としました。現在の問題としては、日本語がわからない、仕事が不安定、もしくは仕事がない。地域社会とのつながりが薄いのではないかとということ。それに対して達成目標は、地域社会の中にとけ込むことです。大事ななのは自分のルーツを否定してまでその社会にとけ込むという考え方ではなくて、しっかり自分のルーツを肯定的に捉えた上で、地域社会にいかにとけ込んでいくかということを達成目標としました。有効な手立てとして、まず一番重要なのが地域社会側の理解。もちろん外国籍の皆さんにも日本語を勉強していただくことも大事ですが、やはり今一番欠けている地域社会側の理解を得られるようにすれば、一番早く社会にとけ込んでいけるのではないかと。逆に阻むものは、その地域社会の理解が得られない根底にある偏見や差別、無理解、無知、そういった面がやはり最後の最後まで影響するのではないかとということで考えました。

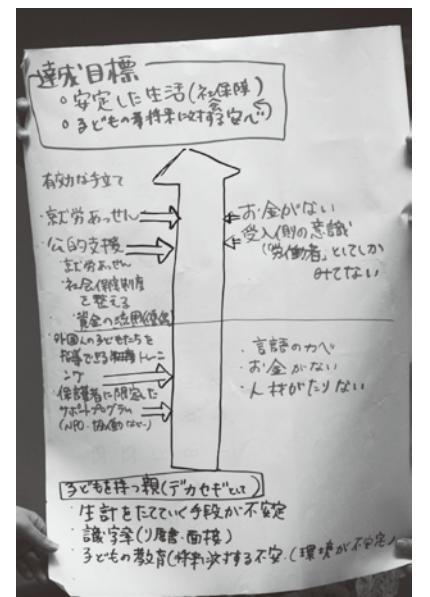


★外国人がある程度数になると、そこだけがグループ化してしまって地域から浮いてしまうことが現状としてあるのではないかと。それに対してどういう社会になればいいかということになります。このことをまったく否定はできないのではないかと。例えば、オーストラリアやニューヨークの現状も同じだと思うのですが、民族同士がひっついて、その中で自分たちの文化を大切にしている一面もあるため、全くそれを否定してしまうことは出来ません。です

から、考えた到達目標が、適切な交流ができる。つまり、最低限の約束事だけはしっかり守る。少ないながらも交流は持っていけるような、そんな社会づくりというのを目標にしました。最大の問題は言葉、文化、習慣の壁です。これによって、お互いの理解がなかなか進んでいかないのだと思います。それを解決していくには、表現は悪いですが、群れる、グループ化することなどを完全に否定しない社会。それも「有り」だというような認識をみんなが持っていく社会づくりを進めていくのがいいのではないかと話し合いをしました。



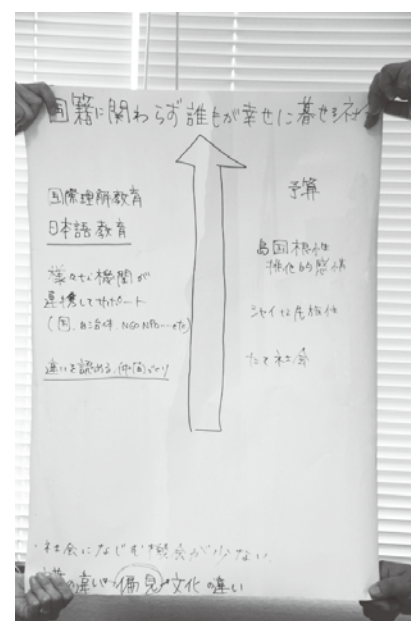
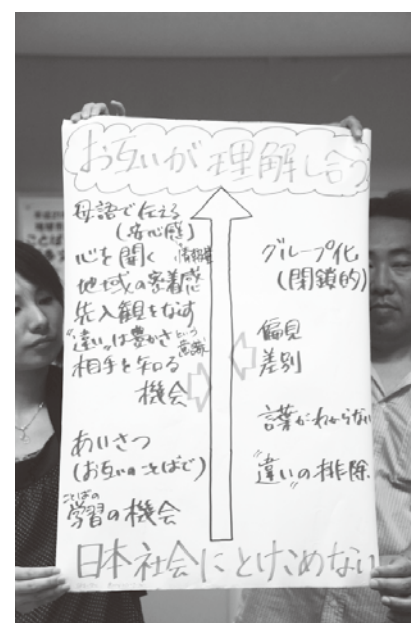
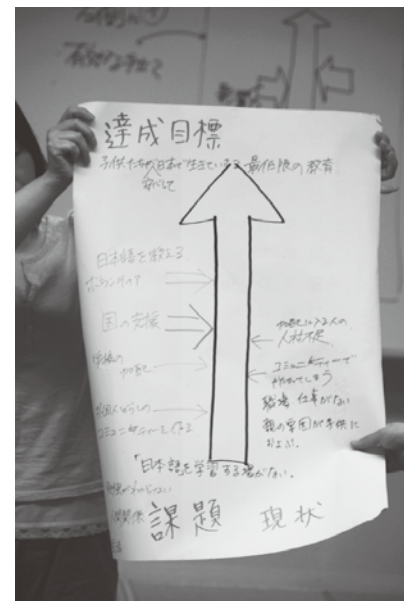
★外国人の子どもの親、特に出稼ぎの労働者として来ている親を対象としました。課題現状は、生計を立てていく手段が不安定なために、例えば子どもが学校に行かせられないということと識字率の問題です。履歴書を書くとか面接なども難しいため、なかなか思ったような仕事に就けないというのがあります。また、将来に対しても不安であるし、子どもの教育自体も不安定である。子どもを持つ親として教育だけでなく自分たちの生計を成り立たせる就労というのが課題の現状です。達成目標は、安定した生活になります。社会保障があることと、その中に子どもの将来に対する安心も含まれてくるのではないかと。有効な手立てとしては、就労の斡旋や公的支援。公的支援の中には就労斡旋や社会保障制度を整えること。資金の優遇措置もあります。子どもに対しては、外国人の子どもたちを指導できる人材のトレーニングにもっと力を入れていくこと。NPOや自治体、学校の先生と協働で保護者に限定したサポートプログラムを作り上げていくことなどが出てきました。阻むものとしては、お金がないということ、受け入れ側の意識です。労働者としてしか見ていないのですぐに切り捨ててしまうことが問題になります。教育の部分については、お父さんお母さんに対する言葉の壁や、人材がサポートするにしてもサポート出来るような人材が足りないというようなことが出ました。



★課題現状を特に子どもたちに絞って考えました。学校現場の課題で、私も実際小学校で勤務していますが、学習が他の子よりもうまく進まなかったり、人間関係だったり、いろんな課題現状があります。達成目標としては、子どもたちが安心して日本で生きていける最低限の教育というところを達成目標にしました。大きな支援としては、国がもっと動いて支援をしてくれること。そこに対する不安要素としては、仕事がないという職場の問題など、親の要因が子どもに及んでいるというケースがあるのではないかと思います。議論がいろいろ出たのが、外国人同士のコミュニティを作っていくという問題です。これは、いい面もあれば、逆にコミュニティで固まってしまってそこからなかなか広がり生まれれないという問題点もあるのではないかと思います。加配教員がもっと学校に入ればいいのにといいものもありますが、逆に誰でも入ってもらったらいわというわけではなくて、加配教員の人材の育成も問題にあがってくるということで、なかなか議論がまとまりませんでした。

★達成目標はお互いが理解しあえる社会です。阻むものとしては、コミュニティが進むにつれてグループ化して閉鎖的になること。それは日本人も外国に行けば同じような状況になるかと思います。情報量がオープンに共有できているかというのが大きく、我々が考える以上に外国から来られている方は非常に不利な状況にあるということをお互い共通認識するべきではないかと思えます。

★大きな課題として出たのは、文化や言葉の違いから偏見というものがあり、それに対する最大の目標というのは、国籍に関わらず誰もが幸せに暮らせる社会づくりを目標に立ててみました。取り組めることとしては、国際理解教育、そして国、自治体、N G O、N P Oなど、様々な機関が連携してサポートしていくことが一番大きなプラス要因になります。外国籍の方自身ができるものとして、日本語教育を受けるなど、日本人と一緒に違いを認める仲間作りというのが、彼ら自身が取り組めるものであり、日本人がサポート出来るものとして、国際理解教育と機関の連携というものがあがりました。しかし、日本のタテ社会というのが、結構阻まれる要因としてあげました。日本人の気性としてまだ島国根性が残っていて、助けてあげたいけど出来ないというシャイな民族性も若干邪魔をしているのではないかと思いますという意見が出ました。



★達成目標は、「セルフエスティームの高まり」です。日本語で言うと、自尊感情が持てるような、そういう社会にしていきたいということをあげました。今の問題は、日本語がわからない方に対しての情報量がすごく少ないことであるとか、日本語を理解できなくて馴染んでいけない親に対してのフォローが不十分であること。そうした大人に対してのフォローがもう少し出来ていくといいのではないかと。そんな中で、地域でもっとつながりを作っていくことが大事になります。今はN P OとかN G O等の第三者機関の方が、頑張ってくださっていますが、行政とか公の部分でも十分協力してもらわなくてはならないのではないか、というようなことが出ていました。

